

土木技術者の原点

木村 亮

KIMURA Makoto

京都大学大学院工学研究科
教授



私は土木技術者の原点は、「人々の暮らしを豊かにし、人々の暮らしを守ること」を胸を張って行動できる実行力と、心意気にあると考える。一般の人々の暮らしを豊かにし、暮らしを守ることが、土木技術者の存在価値といえる。土木技術者の踏ん張りや心意気によって人々が幸せを享受できていることに、感謝されこそすれ、疎まれる謂われはない。ただし、昨今これだけ土木技術で構築された社会基盤に溢れた中で、当たり前のように生活している人々は、その存在意義が分からなくなり感謝する気持ちを持つことが難しい。大雨で橋が流されそうになり堤防が決壊しそうになった時、また土砂崩れや地震で構造物の被害が生じた時、豊かさが守れなくなり慌てるが、そのような事態になつてもなお、土木技術者の頑張りや心意気に対する認識は薄い。

10年ほど前に、アフリカの貧困を削減するというテーマを自ら設定し、土木技術者(特に地盤工学者)として何を具体的にすればいいかを考えた。アフリカに何度も通つて見つけた答えは「未舗装道路の簡便な改良方法を具体的に提示する」ことであつた。見向きもされないような農地や村を結び生活道路は、雨季になると一部が泥濘化して、通行不能になる。十分締固めて道を作らず、道路脇の側溝の整備が不

十分であることが原因である。道は1ヶ所通れなくなると畑から農作物を市場に運べず、病人を町の診療所に連れて行けない。住民はなすすべもなく、通行不能の道を眺め、貧困から脱出できない。重機を使わずに未舗装道路をどのようにしたら、たとえ雨期であつても通れるようにすることができるか。アフリカの泥々道を悪戦苦闘して通りながら、長い間考えた。

最も重要なことは、住民が自らの力で道を直すことである。日本では皆が豊かに生きるためには、皆で力を合わせて、土木技術に少し秀でたリーダーの引きによって社会基盤を整備してきたのである。「土のう」を路盤材に使うという簡単な技術で、有り余る人力を生かし、住民のみならず行政や政治家から喜ばれ、世界11ヶ国で住民と共に道直しを展開している。

私をこの活動に傾倒させている原動力は、道直しが終わった後の住民と直した道を利用する人々の、土木技術者に対する感謝の気持ちの表現である。心意気を再構築させてもらっている。いつしか日本人は、仕事を人への感謝の気持ちで忘れてしまった。電気・水道・ガスの保全で地面を掘る人に、通行の邪魔になるといふ顔をみせる人がいる。工事をしている人が、「暮らしの豊かさを守る」ために努力をしていることをなぜ理解できないのだろうか。

最近、新入生の一般教養科目として理系のみならず文系の学生にも、先の道直しの例のように土木技術が貧困削減を図り、人々の暮らしを豊かにするためにどのような活動を、どのような心意気で実行してきたかを紹介している。その中で大成建設が企画した「民衆のために生きた土木技術者たち」の映画を見せている。生涯に一つでも人類のためになるような仕事をしてから死にたいとパナマ運河工事に参加するため単身アメリカに渡った青山士、新しい信濃川可動堰の建設時に集中豪雨に襲われ、村人を守るために仮締め切りを切れと命じた宮本武之輔、台湾の

不毛の嘉南平原を穀物地帯に変貌させ多くのの人々を救った八田與一、民衆のための血の通った3人の土木技術者の心意気を見て皆が驚く。なぜもっと早くこれらの技術者のことを教えてくれなかったのかと言う。社会基盤の整わなかった時代、土木技術者の「人々の暮らしを豊かにし、暮らしを守る活動」は市民に見えやすかつた。今は見えにくく、見せにくい。そのため多くの土木技術者がその努力を怠っている。

先日カメルーン東南部の熱帯雨林で調査活動を行った。アフリカンマホガニーと珍重される立派な大木が茂る豊かな森である。バナナ、カカオなどを育てる農耕民と身長が150センチにも満たない狩猟民が100人ずつ住んでいる。電気・水道・ガスの無い小さな村で1週間生活した。人々の暮らしを豊かにし、暮らしを守る社会基盤はなにか、人々は何があれば豊かと感じるのか、ずっと考えていた。

電気が無いので夜になると漆黒の闇、晴れた夜には天空が満点の星に覆われ天の川が鮮明に見える。ただし夜に徘徊すると夜行性の毒蛇に噛まれるという。川で水浴びと洗濯をする。プッシュミートと呼ばれる森の中にいる動物の肉を愛し、ドーム型のテントのような葉っぱで覆った家に住み、森の中を驚くほどのスピードで移動する。動物の声を聞き分け、森の木々の実を食し、植物から疫病の薬を取る。社会基盤が何も無いこの村で、人々は豊かに暮らしているのである。自己完結型の生活と社会基盤が何も無いことから、驚くことに彼らの言語に「ありがとう」という感謝の言葉は無い。外来フランス語の「メルシー」を使う。

今の日本は豊かであるのか、豊かさをどう守るのか、次の世代の豊かさが何であるか、私を含めよく分からなくなつた土木技術者は、少し無理をしても社会基盤の無いところに身を置き、土木の存在価値を見つめ直し心意気を鍛え、感謝の気持ちの薄れた市民と対峙すべきであろう。市民の生活の豊かさを、胸を張って今後も守れるように。